

「安心して産めるまち」を目指して



小樽協会病院産婦人科主任医長 くらだ たかふみ

黒田敬史さん

あつけし 厚岸町出身。平成30年4月から現職。年間約120件の分娩を行う。小樽が好きで、潮まつりや龍宮神社例大祭などのイベントにも毎回参加している。

全国的な産婦人科医・小児科医の不足により、本市でも後志地域で唯一「地域周産期*母子医療センター」に認定されている小樽協会病院が分娩の取り扱いを休止していましたが、市や医療機関などで構成する北後志周産期医療協議会の活動により、札幌医科大学より産婦人科医の派遣を受け、平成30年7月に分娩の取り扱いを再開しました。そこで今回は、派遣された産婦人科医の一人である黒田敬史先生へのインタビューを通じて、周産期医療の現状や取り組みについてお知らせします。

*周産期とは、妊娠22週から出生後7日未満までの期間

◎産婦人科医になり、小樽協会病院で主任医長を務める現在の心境をお願いします。

私が産婦人科への専攻を決めた時、産婦人科は忙しさと責任の重大さのため、なり手の少ない科でした。その分いろいろな病院でたくさんチャンスをもたらしながら育つたので、今はそれらを実践する良いチャンスと思っています。

小樽協会病院には、休止していた分娩を再開させるため、後志地域の周産期医療を引き受ける覚悟で赴任しました。実際大変なこともありましたが、それを上回る感動ややりがいを感じています。

◎周産期医療の現状や課題を教えてください。

全国の傾向どおり小樽市の出生数は減少しており、現在は10年前の3分の2以下になっています。その少ない中でも、35歳以上で出産する高齢出産の割合が増えています。また、合併症のある妊娠など、リスクを持っていて、より心配な妊婦さんもいます。そのような方も含めて、この小樽で安心して出産できるようにすることが最大の課題であり、使命だと思っています。妊婦さんがお産の際にほとんどの時間を一緒に過ごす助産師はじめ、スタッフとどのようにチーム医療の体制を築いていくかということも大きな課題です。患者さんの安全を守りながら、職員がモチベーションを維持して働き続けられるような職場づくりを心掛けています。



◎印象に残っているエピソードは何ですか？

最近のお産のことですが、なかなか赤ちゃんが降りて来ず悩んでいた時、助産師が2時間あの手この手で工夫して対応してくれたおかげで赤ちゃんが無事産まれてきたことがありました。改めてお産の尊さを教えてもらいましたし、良いスタッフに恵まれていると感じました。

◎小樽協会病院にはどのような特徴がありますか？



陣痛・分娩・回復を行うLDR室

後志管内で初めて導入されたLDR室があります。LDR室では陣痛・分娩・分娩後の回復まで、部屋を移動することなく行えるので、出産時の妊婦さんの負担を軽減できます。また、胎児超音波検診では、赤ちゃんの発育や異常の有無を丁寧に診察することを心掛けています。「お腹の赤ちゃんをゆっくり見せてくれてうれしかった」という声も聞いています。スタッフと患者の距離が近いことによるメリットもあると思いますし、数字には残らないものですが、一人一人の妊婦さんを丁寧に診ています。

利用者の声



昨年12月に出産した 真由さん

私は初産だったので、病院で行う「母親学級」で、出産までの流れを教えてもらったり、実際に出産するLDR室を事前に見せてもらったりしたので、不安なく分娩に臨めました。小樽協会病院にはいろいろな科があり、妊娠に伴う合併症のことや妊娠中の栄養管理のことなど総合的にサポートしてもらえるので、安心して出産することができます。

入院中は授乳のコツや沐浴の仕方を指導してもらい、出産後も「産後ケア」で育児の相談をすることができてとても助かりました。また、医師をはじめ助産師などスタッフの皆さんも良い人ばかりで、病院の雰囲気もいいなと感じました。



3月に出産を控え妊婦健診を受ける由佳さん

私は小樽協会病院が分娩を休止している間、札幌の病院で第一子を出産しました。現在は第二子を妊娠中で、小樽協会病院で出産する予定です。札幌の病院へ通うには片道1時間以上バスに乗らなければいけなかったの

で、具合が悪いときも長時間我慢しなければならず、とても大変でした。小樽協会病院は家から近いので通院がとても楽ですし、家族が近くにいるので安心します。

黒田先生には第一子のお産でお世話になっていて、分娩を再開した小樽協会病院にしていると知り、小樽で出産したいと思いました。黒田先生はとても人柄が良く、話しやすいのでリラックスして診察を受けることができます。



助産師の上野さん

スタッフ一同 全力で大切な お産をサポートします！



助産師の佐々木さん

◎周産期医療の充実に向けた今後の取り組みについて教えてください。

小樽協会病院は比較的大きな総合病院なので、難易度の高い分娩も一手に引き受けられるよう、対応力を付けていかなければいけないと感じています。リスクの高い症例や、より多くの分娩ができるよう、コミュニケーション教育を多く取り入れて、医療スタッフの教育も行える病院にしていきたいと思っています。

また、市民全体が妊婦さんを大切にする街になってほしいと思っています。必要なときに十分な休養を取らせることができるようにするなど、社会全体でもっと妊婦さんに配慮をしていく必要があると思います。そのため、妊婦さんへの理解を深めてもらう講座を開いています。救急隊員の方が妊婦さんや自宅で産まれて間もない赤ちゃんの搬送をしなければいけないことがごくまれにありますので、いざというときに対処できるように勉強会を開いていて、今後も続けていきたいと思っています。

病院の中だけでなく、街のみんなと連携して産みやすい環境にしたいと考えています。

◆お問い合わせは、保健所保健総務課 ☎ 3117、FAX 1469 へどうぞ。